

[梅の美術展によせて]

院政期絵画にみる梅花

梅を描いた日本絵画のうちここでは、12世紀を中心とした院政期の絵画の中にその表現をみて行きましょう。

平安時代前期に遡る梅の絵画は、現存遺品には恵まれません。屏風歌等の資料からその存在を確認することが出来ます。例えば、延喜15年(915)の齋院御屏風には、「降る雪にいろはまがひぬ梅のはな香にこそ似たるものなかりけれ」(『拾遺集』)と詠進され、雪に梅花が描かれたとみられます。同18年の承香殿女御屏風には「水辺に梅花さきたる」ところが描かれていました(『貫之集』)。雪と梅、水辺の梅は、早春をあらわす典型的なモチーフとなります。

12世紀に入ると現存遺品中に梅の表現を見出すことが出来ます。管見に入ったものをあげますと、前半の遺例として「源氏物語絵巻」竹河一(徳川美術館蔵)、「三十六人家集」のうち「能宣集」上(西本願寺蔵)、「観普賢經冊子」(五島美術館蔵)が、また後期の例としては長寛2年(1164)頃の巖島神社「平家納経」のうち「宝塔品」(「彩絵繪扇」(巖島神社蔵)、「寢覚物語絵巻」第三段(大和文華館蔵)があります。以下、各作品を概観し、当該期における

源氏物語絵巻 竹河1



梅花表現の特質を探ることにしましょう。

「源氏物語絵巻」竹河一は、正月、玉鬘の邸を訪れた薫が庭の梅を觀て宰相の君と和歌を詠みかわす場面です。庭先の梅は緩く左右へカーブを描いて上方へ伸び上がり、幹には緑青を施しています。「能宣集」の梅は、すっと伸びた幹に天を指す枝を配し、大きな銀箔の花を付けます。幹には緑青、銀泥を重ねています。

「観普賢經冊子」は本来歌絵冊子として制作されたものとみられます。第五開には、庭前の梅と寝静まる貴族の邸が描かれます。左隅の僅かな空間にあらわされた梅は白い蕾をつけ、幹は緩やかな弧をなして上方へ伸び、茶味を帯びた緑青が施されます。梅花を覆うように空には銀泥が暈され、月明のある夜景であることが分かります。この図は第六開に記された『古今集』の和歌「ふゆこもりおもひかけぬにこのまよりはなとみるまでゆきそふりける」の歌意をあらわしたものとみられます。屏風歌にみられた雪と白梅との連想がこのような形で絵画化されていることは、平安前期の屏風絵を考えると、示唆的です。

「平家納経」宝塔品は、紙背の

三十六人家集 能宣集上



装飾に梅が用いられます。第一紙裏に老若二本の梅が水辺に描かれます。いずれも根から新しい枝を出し、その先に紅の花をつけます。老木は、一旦右に緩く湾曲させた幹を上方へ伸ばし、その幹には緑青が掃かれ、古木の雰囲気を出します。若木は、細くしなやかな線で描かれます。さらにみて行きますと、第二紙には柳が、続いて、三、四、五、六、七紙には、それぞれ桜、松に懸かる藤、紅葉、落葉と竜胆、寒月が描かれ、四季が展開していることが知られます。紙背に四季を表現することは提婆達多品にもみられます。第一紙に白梅、三、四、五紙にそれぞれ桜、橘(?)、菊が描かれます。第二紙には散華が描かれ、橘と共に四季表現を若干変容させています。『栄花物語』「こまくらべの行幸」には、藤原頼通の高陽院殿を「この世のことと見えぬ。海竜王の家などこそ、四季は四方に見ゆれ、この殿はそれに劣らぬさまなり」と評し、「海竜王の家」には東南西北に四季が配されているとあります。竜女の成仏を説く提婆品に四季表現を盛り込んだ背景として注目されます。

「彩絵繪扇」は、宮中の儀式で用いられた可能性が高く、その図様は当時の屏風絵と密接に関わります。公卿の春遊の光景に紅白二種の梅花が描かれています。小画面でもあり、あまり複雑な樹形はみられません。幾分湾曲の強いものがみられます。またここにも幹に緑青を掃く常套表現が確認されています(秋山光和『平安時代

平家納経 宝塔品



世俗画の研究』)。

「寢覚物語絵巻」第三段は、冷泉院の勘当を被り、女三宮との仲を裂かれた主人公まさこが初夏の夜、女三宮付の女房中納言の君を尋ねた場面です。庭前に梅の青葉が描かれます。これまでの作例と異なり、樹形は二本の太い幹が地を這うように根元から左へ曲がり、うち一本はさらに右へ反転します。残る一本は二つの枝に分かれ、一方は上方へ、他方は地面と水平に左へ伸びます。動勢の強い樹形からは、12世紀末に梅の表現が新たな展開を迎えたことを感じさせます。但し、「寢覚物語絵巻」においては、梅に限らず複雑な樹形がみられます。葉は緑青白緑二色で描き、諸処黄味の強い緑青が点じられます。実をあらわしたものでしょうか。幹に緑青を施す定型表現も苔を描くのみとなります。早春の景物であった梅が初夏に描かれることも注意されます。

以上のように、12世紀前期の梅樹の表現は、内側に緩い弧を成しながら上方へ伸びる形態を特徴とします。また幹に緑青を施す点も共通します。但し、12世紀の末頃から梅樹の表現が変質するようです。その要因の一つに宋画との関係が考えられます。北宋時代末には「墨梅」が成立し、著彩画以外にも梅を巡る絵画が多様化しており、それらとの比較が今後の課題となります。(挿図は『日本絵巻物大成第一巻』『日本の美術397号』『平家納経の研究』から複写しました。)(増記隆介)

寢覚物語絵巻 第3段

